別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　菊地俊一

本論文は、英語授業における映画教材で英語字幕を取り入れることの教育的効果を、工業高等専門学校の学生を被験者として 1 年間におよぶ長期の実験を基に、特にキーワードの英語による提示(keyword　caption)の優越性を検証することを目的として執筆されている。研究開始の当初より字幕の有効活用に関心を持っていた菊地氏に対する keyword caption の提案は前言語情報科学専攻所属の松野和彦教授によってなされたものであり、本研究はそれを出発点として、先行研究の不備を参照しつつそれらの不備を補うことによって、理論と実践の両面から取り組んだものである。

論文は 2 つのパートに分かれ、Part I は第 I 章から第 IV 章まで、Part II は第 V 章から第 VII 章までとなっている。Part I はいわば理論面、Part II は実践面に焦点が当てられてはいるが、両者が緊密に結びついている本研究では、2 つのパートを峻別することはできないし、そうすることは、研究の意義を損なうことになりかねないが、以下順を追って各章をごく簡単に概観する。

第 I 章"Introduction"では、従来英語教育の現場で広く取り入れられている英語の字幕付き映画教材が真の意味で英語聴取能力に寄与しているのかどうかという問題がまず提起され、その問題を検証するために本研究では次のような 4 つの仮説が提示される。すなわち、発話そのままを省略することなく提示する字幕である full　caption と重要語だけを選択的に提示する keyword caption を比較した場合、仮説 1 として、keyword caption で学んだクラスの方が full　caption で学んだクラスよりも、keyword に関連する理解度テストにおいて理解度が優る、仮説 2 として、keyword に関連しない理解度テストにおいて caption 無しのクラスに比べて keyword クラスの方が優る、仮説 3 として、1 年間の実験の後、全般的聴取理解力において、keyword クラスの方が進歩が見られる、仮説 4 として、keyword　caption の方が full　caption よりも学生の積極的な反応が得られる、という 4 つの仮説である。

第 II 章"Uses of Movies in Language Learning"では映画の創生期から今日までの教育手段としての歴史の概略が辿られる。第 III 章"Listening　Comprehension"では、「聞いて理解する」ということはそもそもどういうことなのかが、「聞く」と「理解する」の両面から、根本的、理論的に論じられる。その理論的考察を基にして次の第 IV 章"Effectiveness　of Keyword Captions"では、John Morton の logogen モデルに依拠しつつ、keyword caption が full　caption と比較して、単語や文章の聴取理解において学習者の情報摂取の際の負担軽減という点でいかに有利であるかの理論的裏付けが試みられる。

Part II の最初の章第 V 章"Literature　Review"では字幕付き映画が、聴覚障害者および健常者の教育にどのように実験、実践され、また評価されてきたかが、内外の研究論文の批判的読みと共に網羅的、かつ、詳細に紹介される。続く第 VI 章"Preliminary Experiments"では、本実験に入る前の予備的実験授業が紹介され、ここで得られた知見と反省を基に

綿密、周到に構成された本実験が、第 VII 章"Main　Experiment"で報告され、統計処理を経た上、分析、評価されている。本実験は、菊地氏の勤務校である沼津工業高等専門学校の 1 年生、170 名を対象に、第 1 段階では 10 回の授業に 1 作品を視聴する形で、また第 2 段階では、それとは別の 1 作品を同じ回数だけ、合計 20 回という手順で行なわれた。被験者は full caption 組、keyword caption 組、caption 無しという 3 つの実験群と、教材に映画を全く使用しない統制群の 4 組に分けられ、それらの比較実験という形が取られた。pretest、posttest は言うまでもなく、第 1 段階終了時の middle　test や、テープの聴き取りよるテストだけでなく、ビデオテープの視聴まで含めた検証の結果、上述の 4 つの仮説の内、1 ～ 3 までは、部分的に立証され、仮説 4 は全面的に立証されたことが明らかになる。最後の第 VIII 章、"Implications for Further Research"では、keyword の選択基準、学習者の習熟度別の効果の差異、授業の構成や教材の開発等、本研究で必ずしも明らかにされなかった諸点や今後の応用の可能性まで考察している。

ほぼ以上が本論文の主要な論点と具体的な実験の内容、および結論の概要である。これで明らかなように、本研究においては、仮説は全体としては部分的立証に留まっているとは言え、実験の過程と結果で得られた数々の知見は、映画字幕の教育的効果についての従来の諸研究に立脚しながらも、その不備を補いつつ独自の説を提唱し、それを現場での授業に応用してその有効性を検証することに成功していると言える。具体的には、まず第一に、本研究の独自性が挙げられる。従来のこの方面の実験の多くが 1 回限りの、しかも、数分の題材を基にしたに過ぎず、Paul　Markham や小張敬之らによって長期実験の必要性が痛感されていたにもかかわらずその実現はされていなかったのに対して、本研究は、実験の効果を検証するためのテストまで入れると全 23 週の長期に及ぶもので、学校教育現場の現実そのままを生かしており、このような実験例はこれまでのところ世界に類がない。また、被験者も、従来の研究が大学生、成人、あるいは聴覚障害者が中心であったのに対して、本研究は、中級段階の学習者を被験者としており、これまで検証の手が着けられていなかった年齢層を扱った意義は大きい。このような実験は、長期に亘って特定の実践的研究現場に直接関わることが可能な社会人研究者の利点を遺憾なく発揮したものとして特筆すべきであろう。

第二に、full　caption では学習者は字幕を読解するのが精一杯で聴覚情報の処理の余裕がなくなるのに対して、keyword　caption ならば、時間的にも、解読作業においても余裕が生ずることにより、聴覚情報の処理はもちろん、聴取を巡る方略的技能の発達に従って、明示的に語られた発言の裏の言外の意図や感情までも推察できるようになるという実践的仮説が、完全にではないにしても、その可能性がある程度の説得性をもって示唆されたことは注目に値する。

また、これと表裏一体の関係にあるが、外国語教育界では理論的にこれまで曖昧なままで論じられることが多かった「聴き取り」および「理解」という 2 つの難問に果敢に立ち向かおうとした点も評価できる。中でも「理解」が、単に事実的情報の受け渡しに留まるものではなく、相手の意図や感情の察知まで含むべきであるとし、学習者がそれを達成しているかどうかを確認するために、直接に言表に現れることのない、言外の内容までも汲み取るよう導く類推的問題をも毎回のテストに含めるよう工夫した点は、生きた人間と人間同士のコミュニケーションに注目した場合、今後の理解度測定のテスト

のあり方に一つの重要な示唆を与えるものである。これと関連して、単に音声テープだけに頼る従来の聴き取りテストに加えて、現実の言語活動により近い視覚も含めたビデオテープを利用した聴き取り問題の必要性を認識している点も見逃せない。

とはいえ、改善の余地が全くないという訳ではない。まず、4 つの仮説の内、全面的に実証できたのは 1 つであり、他の仮説が部分的実証に留まざるを得なかった理由の検証が今後の第一の課題として挙げられるであろう。これは、keyword 字幕の技法が先行し、理論的裏付けが後行してしまったという本研究の発展過程にその原因を求めることができよう。また具体的な技法面でも、字幕の提示のタイミング、教材となる映画の選択等の再検討や、学習習熟度別に見た場合の効果のさらに細かな分析が必要になると思われる。中でも、例えば、字幕提示のタイミングは、デジタル技術の急速な進歩により、菊地氏が本実験に取りかかった当初ではまだ普及していなかったミリセカンド単位の字幕提示タイミングの調整が今日ではパソコンレベルで実現可能となっている。今後はこうした技術的進歩を積極的に生かした研究が望まれる。また、keyword 字幕教材が英語教育全体の中で占める位置と意義の検討が急務であろう。すなわち、学校教育の授業において、英語聴取による理解に重点が置かれる余り、英語運用能力全体に歪みが生じないのかどうか、具体的には、語彙力増強や能動的表現能力の育成と字幕教材がどう関わるのか等の問題を理論的、実践的に深める必要がある。

このように、今後取り組み、解決すべき問題点は残しているものの、本研究の根幹を揺るがすようなものではなく、その多くは著者の今後の研鑽に待つべき事柄であって、本論文の学問的および実践的意義と貢献をいささかも損なうものではない。

したがって、本審査委員会は博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。